

独立行政法人
国立病院機構

相模原病院からの

http://www.hosp.go.jp/~sagami/

みみ

耳よい

メール

国立病院機構 相模原病院 広報誌
平成24年3月1日号
発行：国立病院機構 相模原病院
発行責任者：秋山一男
住所：相模原市南区桜台18-1
電話：042-742-8311（代表）
F A X：042-742-5314

第56号



秋山病院長、江口看護部長と当院自衛消防隊

第56号 目次

「地域医療支援病院の承認について」..... 2	「にきびの対処法」..... 8
「第一回相模原病院登録医連絡協議会」..... 3	「春の健康レシピ」..... 9
「自衛消防隊消火競技会に参加して」..... 4	「消防訓練の実施」..... 10
「言語聴覚士」..... 5	「道路の拡張工事について/ 院内コンサート」..... 11
「大腸内視鏡検査」..... 6	連載 近隣協力医療施設の紹介コーナー 原町田 「みるるクリニック」..... 12
「マタニティヨガ」..... 7	編集後記 12



SAGAMIHARA
NATIONAL
HOSPITAL

私たちは患者の皆さまの
人権を尊重し、
十分な説明と同意に基づ
き親切で心のこもった医
療を提供します。

「地域医療支援病院の 承認について」



病院長
秋山 一男

当院受診中の患者の皆さん、また相模原市はじめ地域の方々におかれましては、常日頃当院に対してご支援をいただきありがとうございます。

当院は相模原市からの認可を受け、平成23年10月1日から“地域医療支援病院”となりました。皆さまにはあまりなじみのない名称と思いますが、地域医療支援病院とは、地域の医療の中心として近隣の開業医の先生をはじめとした医療機関と密接な連携をとり、地域の住民の皆さまの医療の責任を担う中心となる施設とい



うことです。現在相模原市には、市の中・北部における地域医療支援病院として相模原協同病院が既に認可されており、当院が市の中・南部における地域医療支援病院として、このたび認可された次第です。

地域医療支援病院の主な認定要件を挙げますと、紹介患者さんに対し医療を提供する体制が整備されていること。すなわち地域の中心病院としての機能を十分に果たすために地域の医療施設との病診連携を深め、地域の開業医家をはじめとする医療機関からの重症患者さんや診断・治療困難な患者さんの紹介を積極的に受け、一方、入院治療が終了された患者さんや診断・治療法が確定した外来患者さんについては、日常の治療・管理を地域の一般医家の先生に紹介（これを逆紹介といいます）させていただき、急性期病院として地域の中心医療施設としての役割を果たすこと。その基準として、

紹介患者さんの割合（紹介率）を初診患者さんの40%を上回り、かつ逆紹介患者さんの割合（逆紹介率）を初診患者さんの60%を上回るようにすること。救急医療を提供する能力があること。すなわち、入院治療を必要とする重症救急患者さんに必要な検査、治療ができるよう、通常の当直体制の外に重症救急患者さんの受け入れに対応できる医師等医療従事者が確保されているとともに、重症救急患者さんのために優先的に使用できる病床または専用病床が確保されていること。

当該病院の施設・設備が地域の開業医の先生の利用のために開放され、病院を共同利用す



ることができるようにすること。そのために地域の開業医の先生に登録医として登録いただき、より緊密な病診連携ができるよう整備すること。地域の医療従事者の資質の向上を図るための研修を行う能力を有すること。すなわち院内で実施する地域の医師等を含めた症例検討会、医学・医療に関する講習会等を定期的に行うほか、地域の医師等も利用できる図書の整備などの体制を整えること等が挙げられます。

我が国の医療事情は、皆さまも日々感じておられることと思いますが、現在、高齢化社会に向けて多くの問題点が噴出しています。我が国の誇る国民皆保険制度の利点と医療費高騰に対する国の政策が必ずしも整合性を持って解決の方向に向かっているとは言えない現状です。その中で、当院が地域医療支援病院として、地域の開業医の先生との医療連携を緊密にすることにより、急性期医療と重症難治性疾患に対する診断治療は国立病院機構相模原病院において担当し、日常の診療・予防管理は自宅あるいは職場の近くの開業医の先生が担う。このような適切な役割分担を確立するという病診連携を進めることで、地域住民の方々の健康を守るシステムを確立できることを願っております。

今後とも私ども国立病院機構相模原病院職員一同、地域医療支援病院の名にふさわしい医療を提供するよう務めますとともに、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

「第一回相模原病院 登録医連絡協議会」

地域医療連携部長
石井 豊太



ここ数年で私たちを取りまく医療環境はめまぐるしく変化してきております。そうした中で、近隣の診療所で日常的な診療や健康管理等を行っていただく“かかりつけ医”が存在することはとても大切です。

当院は昨年10月に相模原市で2番目の地域医療支援病院になりました。地域医療支援病院の役割の一つに、かかりつけ医の先生方と密に連絡をとり、入院が必要などときには病院で、外来通院が可能になれば、かかりつけ医の先生方の診療所で診療していただくことが挙げられます。昨年より当院からかかりつけ医としてお願いした先生方にご承諾をいただき、1月12日現在までに281名の先生方から賛同を得られました。

その先生方との顔合わせとして、1月12日に第1回国立相模原病院登録医連絡協議会・懇親会が相模大野のホテルセンチュリーで開催されました。当日はこの冬一番の冷え込みでしたが、107名の出席予定者のうち67名の方々に参加していただくことができました。

19時を少し過ぎて、当院の金田統括診療部長より開会の挨拶があり、秋山病院長より、地域医療支援病院認可までの長かった道のりと、これから当院が地域医療支援病院であることの意義についてご挨拶いたしました。

次に相模原市医師会長の黒沢恒平先生より、ご挨拶をいただきました。その後、今回登録してい



秋山院長の挨拶

ただいた先生方にお渡しする登録証を秋山院長よりお渡しいたしました。続いて、当院の安達外来・病棟部長、石井地域医療・情報部長、森手術部長の紹介がありました。その後、各科医長より、登録医の先生方に是非知っていただきたい、各科の今現在行っている診療内容をご紹介し、最後に渡部副院長より、今後も尚いっそう連携を強めるべく体制づくりに努めることをお約束し、協議会は終了しました。



登録証贈呈の様子

そして20時を過ぎてから、協議会に参加いただいた先生方との意見交換会が始まりました。はじめに、相模原市病院協会会長の黒河内三郎先生よりご挨拶をいただき、次に相模原市健康福祉局福祉部長の柿沢正史様、北里大学病院長の藤井清孝先生より特に相模原市のこれからの医療環境について、それぞれの病院、診療所、開業医の役割をしっかりと果たすことが大事であるとお話がありました。続いて、元相模原病院院長・現横浜市病院経営局病院事業管理者の高橋俊毅先生より、地域医療支援病院を維持していくには病院で働く個人個人のさらなる努力が必要で、特に救急医療等への取り組みも大事であること等の、先輩からのメッセージをいただきました。相模原市健康福祉局の小竹久平保健所長、相模原市で最初に地域医療支援病院に認可された相模原協同病院院長の高野靖悟先生からも激励のお言葉をいただきました。

今回の登録医連絡協議会においては、地域医療にご尽力いただいている医師会、病院協会の多くの登録医の先生にご出席いただき、当院の診療内容の紹介と、当院各診療科医長との意見交換の機会を持てましたことは、今後の地域医療支援病院として地域住民の方々の医療を支える施設としての当院の責任をあらためて、肝に銘じました。本協議会でいただいた激励の言葉の数々を胸に刻み、地域の医療を支えていきたいと思っておりますので、これからも相模原病院をよろしく願いいたします。

「自衛消防隊 消火競技会に参加して」

医事係長
木村 直



平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、各地で起きた災害により、多数の犠牲者がでました。この未曾有の災害は、発生から1年が経つ今でも、皆さんの脳裏に焼き付いて、消えることのない記憶の一つではないでしょうか。当時は相模原市でも大きな揺れを感じ、災害が身近にあるものだと感じた人も少なくないと思います。当院でも、職員一同、防災意識がより一層高まったことは言うまでもありません。

そのような状況の中、私は相模原病院の自衛消防隊の任命を受け、病院を代表して相模原市防災協会主催の自衛消防隊消火競技会に参加することとなりました。この競技会は毎年開催されており、相模原市の事業者による自衛消防隊が参加し、消火活動を実際に近い状況下で演技により競技するもので、当院は今回初参加ということもあり、気合も一入でした。

相模原病院の自衛消防隊を簡単にご紹介します。自衛消防隊は現在6名で、1チーム3名、Aチーム・Bチームの2チームが編成されています。Aチームは爽やかで優しい男性看護師3名から構成されており、Bチームは、私が隊長、隊員は覇気のない背高のっぽの1番隊員と、とても緊張しやすい生真面目な2番隊員の事務職員3名で構成されました。Bチームでは、まず凸凹隊員をまとめることから始まり、自分たちが相模原病院を代表した自衛消防隊であること、自覚を持って防災意識を高めることに苦労しましたが、競技会の練習を重ねるに連れて、隊員たちの取り組む姿勢や防災に対

する意識の変化が見られ、協議会本番でも練習の成果を十分に発揮することができました。そこには頼りない隊員たちの姿はなく、チームとしてまとまりを感じました。

この競技会では、実際に屋内消火栓を使用し、ホースの連結や収納、放水といった操作をすることができ、正に自衛消防隊として必要な体験をすることができまし



た。このような機会がなければ消火栓に触れることもなく、自衛消防隊とは名ばかりのもので、もし震災や火災が発生したら、私は被災者の一人になっていることでしょう。しかし、今では自衛消防隊として、防災意識の向上だけではなく、消火技術を身につけたことで、震災や火災が発生したとき、目の前に消火栓があれば、消火活動に参加することができ、犠牲者を1人でも多く減らすことができるかもしれません。これはとても小さな正義感なのかも知れませんが、命の尊さを知る病院職員だからこそ、防災に対する意識や知識が重要であり、競技会への参加は、防災活動の重要性を認識する貴重な体験でした。

備えあれば憂いなし。災害は身近にあるものです。災害と防災について、皆さんも今一度考えてみてはいかがでしょうか。



「言語聴覚士」



言語聴覚士
池山 順子

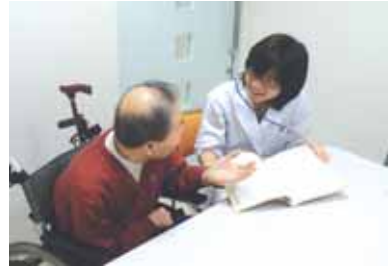
「言語聴覚士」という職種をご存知でしょうか。言語聴覚士 (Speech Language Hearing Therapist) とは、言葉や聴こえなどのコミュニケーションの障害、飲み込みに障害のある方のリハビリテーションに携わる専門職です。1999年から国家資格試験が開始され、現在約1万8千人の有資格者がいます。言語聴覚士は医療、保健、福祉、教育機関などの各分野で活動しており、今後より多くの人材が求められています。一般的にリハビリと聞くと、手足を骨折した際などにリハビリを行う理学療法士や作業療法士をイメージされる方が多く、まだまだ言語聴覚士の認知度は低いのが現状です。当院リハビリテーション科も今までは理学療法士・作業療法士のみでしたが、昨年5月より言語聴覚療法部門が開設になりました。この場を借りて言語聴覚士について知っていただければと思います。

* コミュニケーションの障害 *

私たちは日常生活の中で、大切な人のことばを聞き、ことばを使って思いや考えを相手に伝え、コミュニケーションをしています。この過程のどこか1点でも困難になった時、コミュニケーションの困難さが表れてしまいます。具体的には脳卒中などの後遺症により現れる“失語症”や呂律が回りづらくなる“運動障害性構音障害”、パーキンソン病など神経疾患による“声量の低下”、ことばの発達の遅れ、耳の聞こえづらさなどが挙げられます。

どの方にとってもコミュニケーションは人との関わり、社会生活において重要であり、大切な機

能の一つです。コミュニケーションにおける困難さの理由をSTが評価し、機能の改善、代



償方法の選択などを行います。“様々な方法で、楽しく自信を持ってコミュニケーションができるように”を目標にリハビリを行っています。

* 飲み込みの障害 *

飲み込みの障害のことを、“摂食・嚥下障害”と言います。お食事を見て認識するところから、咀嚼し飲み込むまでの一連の動作の中で、どこかが困難になってしまった状態を指します。具体的には「水分を飲んだ時にむせてしまう」「食事に時間がかかるようになった」...などの症状をさし、脳卒中や神経・筋疾患・加齢などにより起こるとされています。摂食・嚥下障害により誤嚥(水分などが誤って気管に入ること)してしまうと“誤嚥性肺炎”になってしまう可能性があり、摂食・嚥下障害は見過ごしてはならない症状の一つです。摂食・嚥下機能(飲み込みの力)を正しく評価し、安全で、美味しく召し上がっていただけるように支援をするのがSTの役割だと考えています。

当院では摂食・嚥下機能の正しい評価のために耳鼻咽喉科と協力し嚥下造影検査・嚥下内視鏡検査を適宜実施し



ております。その評価を踏まえ、その方に適したリハビリ・食事内容の決定

を看護師とともにを行っています。また退院後の生活でも安全にお食事を召し上がっていただけるよう、調理の工夫などを栄養士・調理師とともにご提案できるよう取り組んでいます。

当院のSTは現在1名であり、STのリハビリは入院患者様中心にご提供させていただいていますが、コミュニケーションや飲み込みについて御心配な点などございましたら、ぜひ声をかけていただければと思います。お気軽にご相談ください。

「大腸内視鏡検査」

消化器科医長
菅野 聡



当院では平成22年度に大腸内視鏡検査を1,635件行っており、そのうち相模原市大腸癌検診の二次検診にて大腸内視鏡を受けた患者さんは202件でした。また当院の大腸内視鏡にてポリープ切除術をされた患者さんは約400人いらっしゃいます。

大腸内視鏡検査というと、痛い、おなかがはって苦しいなどの先入観があるかと思いますが、現在は麻酔薬を使用し、苦痛を軽減した方法を希望される患者さんがほとんどです。

大腸内視鏡を受けられる患者さんは検査前に必ず医師・看護師の問診を受けていただき、排便習慣、薬剤アレルギー、既往歴、を確認します。大腸内視鏡では検査前処置として下剤を服用していただきますが、下剤を服用するのが困難と思われる場合は注腸造影など他の検査に変更する場合があります。

検査前日は、食物繊維含有量を少なくした食事と夜8時頃下剤(ピコスルファートナトリウム10M μ 、センノサイド2錠)服用していただきます。これで大腸内の便をなるべく排出します。

検査当日は、朝食を摂らず液体(1800M μ)の経口腸管洗浄剤を200M μ ずつ1時間当たり1リットル、約2時間で服用していただきます。排便に、便粕がなくなり、黄色で透明な液体になれば検査に適した状態となります。腸管洗浄剤は以前より味覚も改善されており飲みやすくなっています。しかし服用量が多いため、高齢者の患者さんの場合は洗浄剤を減量する場合もあり、また現在は自宅で下剤を服用し、来院していただいています。しかし高齢の患者さんや下剤の服用に不安のある方は検査前日、

または検査当日朝に入院していただき、安心して下剤を服用できるよう対応しています。新外来棟が完成した際には、検査当日朝に病院内で腸管洗浄剤を内服できるように体制を整える予定です。

患者さんのご希望により、検査直前に点滴を開始し疼痛を和らげるためミダゾラム 静脈麻酔薬を使用します。これにより患者さんの意識状態が低下するので血圧、呼吸状態をモニターにて監視しながら検査を開始します。



大腸内視鏡検査では大腸全体、時には小腸まで内視鏡を挿入し大腸がん、大腸ポリープ、炎症の有無について精査します。診断のため大腸粘膜の一部を採取し病理組織診断をしたり、内視鏡にて切除可能なポリープを切除する場合があります。この時重要なのはアスピリン、ワーファリンなど血液をサラサラにする薬剤を服用している患者さんです。なぜならばポリープを切除したりする場合は数日前より内服薬を中止する必要があるからです。外来にて大腸内視鏡検査を予約される場合には内服されている薬剤の内容がわかるようにしていただくことと、内服されている薬剤を一時中止しても問題ないか処方されている主治医の先生に確認していただくとお助かります。

このような検査を受けていただいた後、外来にて切除したポリープの結果説明しております。また大腸がんなど外科での治療が必要であることが判明した場合は外科にご紹介し手術前に必要な検査を受けていただきます。

大腸内視鏡にてポリープを切除された患者さんはまだポリープが残存していたり、新たにポリープが発生することもあるため1年後の経過観察をお勧めしています。当院より患者さんにポリープ切除1年後にお手紙を郵送し大腸内視鏡を受けていただくようご連絡しています。このときはかかりつけの先生に内服中の薬剤などの紹介状をいただくと、患者さんの情報がわかやすく私どもも助かります。

このような情報が患者さんの検査を受ける助けになれば私どもうれしく思います。ご不明な点があれば、内科外来にて消化器科医師にご相談ください。

「マタニティヨーガ」

日本マタニティ・ヨーガ協会
認定インストラクター
2階北病棟 助産師
清澤 香織



助産師として毎日お産に関わり、陣痛に必死に向かい合う産婦さんにはいつも感動させられます。呼吸法を続けて痛みを散らし、少しでも楽な体勢を探して動いて…。その底力を見たとき、私たちが普段使っていない力、生き物としてのすごさを感じます。

一方「怖い。嫌だ。こんなの耐えられない。いつになったら終わるの？誰かどうにかしてください。」という感情で頭がいっぱいになってしまうと、全身ガチガチ、頭も身体も疲れ果てて、お産の進行が遅くなるという悪循環に陥ってしまいます。日々陣痛にめげそうになっている産婦さんに、気持ち切り替えてもらえるよう励ましたり、さすったり、動くように促したりしていますが、陣痛が来る前に何か準備できるといいですね。その方法のひとつがマタニティヨーガです。マタニティヨーガは、身体への気づきを深めて、妊娠中の不快な症状を和らげ、安産のために役立ちます。

普段私たちは、自分の身体はすべて自分の意思でコントロールしていると思いがちですが、緊張したときや痛みがあるとき、知らない間に呼吸が速く浅くなり、肩に力が入っていたという経験があるはず。呼吸と感情の動きは互いに影響しあっています。マタニティヨーガを通して深くゆったりとした呼吸を身につけることで、恐怖感や緊張をコントロールできるようになります。

また、深くゆったりとした腹式呼吸は、お産のとき赤ちゃんにたくさん酸素を送り届けるのに役立ちますが、妊娠中から練習することで横隔膜や

腹横筋などのインナーマッスルを刺激し鍛えることにもなります。横隔膜は赤ちゃんを力んで産むときに大変重要な筋肉です。横隔膜を意識できるようになると、効果的なきみができるようになります。

妊娠中は、腰背部痛、眠気や頻尿、便秘などマイナー

トラブルと呼ばれる不快な症状が起きて体の変化に敏感になる時期です。次第に大きくなるお腹や赤ちゃんの胎動などで体へ意識が向きやすく、赤ちゃんのために普段以上に身体に気をつかう時期でもあると思います。裏を返せば、この時期は身体を

ていねいに内観するチャンスでもあると言えます。ヨーガを続けて行うことで、腰背部痛や肩こりなどを和らげる事も出来ます。

平成23年の3月から12月まで7回のマタニティヨーガの公開講座を実施しています。参加者からは、「指先や肩に血液が巡るのが感じられておもしろかった」「とても気持ちよくて途中で寝てしまいそう」「本を読んでも分からない出産との関わりの説明や、リラクスの方法がとても良かった」など好評です。

マタニティライフをより豊かにするためにも、多くの妊婦さんにマタニティヨーガを体験いただければと思います。



「にきびの対処法」

皮膚科
白井 明



にきびは、皮膚科学上「尋常性ざ瘡」という名の疾患です。立派に“病気”と考えていただいてよいでしょう(かの柳原女史もそうっておられます)。患者さんの数は非常に多いのに、いざ“病気”として治そうとするとなかなか治療が難しい。おもに顔にできますから、人目が気になって、深刻な悩みの種になることも少なくありません。

そんな悩めるにきび患者さんに、強調しておきたいことがひとつあります。「にきびはいつかは自然に治る」よほどの特殊体質でない限り、にきびは一過性の疾患です。年余にわたることもあります。うまく付き合っていけばいつかはきつといなくなってくれます。だから、むりに我慢しないで、ぜひきちんと皮膚科の治療を受けてください。最大の目標はあとに禍根(=癬痕、すなわち“あばた”です)を残さないことです。化膿して深いところに及んだものほど、癬痕を残しやすくなりますからご注意ください。

にきびはなぜ、“青春のシンボル”なのでしょう。あえて簡単に言ってしまうと、皮脂腺の働きが性ホルモンに強い影響を受けるからです。とくにバランスが男性ホルモン優位に傾くとできやすくなり、現代女性ではむしろ「思春期後ざ瘡」といって、20~30歳代に一時的にホルモンバランスが崩れて出てくるにきびが多くなっています。

ざ瘡のできるメカニズムを、おおざっぱにまとめてみます。



毛孔の角化・閉塞

皮脂や老廃物が毛包内に蓄積

(「面皰」=白にきび)

毛包の破綻・炎症(「炎症性ざ瘡」=赤にきび) 細菌の増殖・化膿(「膿疱性ざ瘡」=おでき)だから、一番大事なのは最初のステップを起こさない、つまり毛穴を詰まらせないことです。適度な回数(朝夕2回でけっこうです)の丁寧な洗顔と、そのあとのスキンケア(保湿)が何より重要です。スクラブ入りの洗顔剤はかえって肌を荒らして、毛穴のつまりを助長することがありますからあまりお勧めできません。顔の洗いすぎも同様です。(顔のかさかさ肌は、多くは水分が足りない「乾燥肌」ではなく、軽度の「皮膚炎」の表れであることが多いのです。)保湿剤は自分に合うものを試行錯誤で見つけていただくしかありませんが、皮膚科医がお役に立てることもあります。また、ステップを軽減するために、睡眠と規則正しい生活がお勧めです。食べ物はあまり関係ないみたいです。

あとは、・ ビタミン剤や漢方薬内服、圧出(レーザー=保健外) ・ 抗生物質の内服・外用など、皮膚科医の腕の見せどころになります。

近年画期的なのが、を直接改善するアダパレン(ディフェリンR)ゲルが広く使えるようになったことです。(可奈子ちゃんがCMに出るわけです。)ビタミンA系統の塗り薬ですが、角化を抑制し毛穴のつまりを改善して「面皰」=にきびのたね、を出来にくくしてくれるのです。難しかったざ瘡の治療が、この薬のおかげで本当にしやすくなりました。ただし使い方に注意が必要なので、やっぱりこの言葉で結びます。「にきびは皮膚科へ！」

当院のホームページにアクセスしてみませんか



「診療科のご案内」
「外来診療担当医表」
「休診のご案内」など当院からの最新の情報が掲載されております。ぜひアクセスしてみてください。

<http://www.hosp.go.jp/sagami/>

「春の健康レシピ」

栄養管理室室長
田代 保恵



皆さん、毎朝お食事を召し上がっていますか？
「春眠暁を覚えず」との言葉もありますが、働き盛りのサラリーマンの方々や学生さんからは、前の晩遅くまで起きていて翌朝は出勤・登校時間のギリギリまで寝ているので、朝食を摂る時間がありませんとおっしゃることが多く見受けられます。まずは早寝早起きを心がけ、朝食を摂る習慣作りから始めましょう。



朝食は今日一日を元気に頑張るための大切な活力源です。

朝食を食べると体温が上昇し、体も目覚め、脳へのエネルギーが供給されます。充実した1日を過ごすには、まず朝食を簡単でも良いので、主食・良質たんぱく質・ビタミン類の摂取を意識したお食事になるようにしていただくと良いですね！

右上の写真は実際に相模原病院で提供させて戴いている朝食の和食と洋食のメニューです。

なお減塩食が必要な方は、味噌汁の汁は1/2量程度に控えその分汁物の具を多くしたり、漬物の量を少量に調整し、お浸しやトマト等に替えたりすると良いでしょう。朝食を召し上がる習慣の無いかたは、まず乳製品や果物などを口にされることをお勧めします。

【和食メニュー】

御飯、味噌汁、卵焼き、野菜の白和え、ふりかけ、牛乳



【洋食メニュー】

バターロールパン、ジャム、スクランブルエッグ、温野菜サラダ、クラムチャウダー、牛乳



昨年の東日本大震災を機に、ご自宅に非常食として缶詰類を常備されている方も多いのではないのでしょうか？そこで、今回は非常食としても便利なシーチキン缶とホールコーン缶を利用した見た目も春らしく美味しく簡単な「洋風混ぜずし」を紹介致します。

用意する物は、御飯とシーチキン1缶にホールコーン小1缶、カニ



かまぼこ、軽く塩もみした薄切りのキュウリと人参。これをすし酢と塩・こしょうで和えるだけ。簡単に作れますが、栄養のバランスがとても良くおすすめです。是非おためし下さい！

栄養相談のご案内

当院では、医師の指示のもと、入院・外来患者様に対し管理栄養士による栄養相談を行っています。

患者様一人一人の健康状態だけでなく、嗜好や生活環境に配慮した指導を心がけており、無理なく健康的な食生活が送れるようお手伝いいたします。

栄養相談は平日8:30~17:00の間に、お一人様あたり20分~50分程度の枠を設けており、外来受診当日の栄養相談のご希望にも出来る限り対応いたします。

栄養相談を希望される患者様は、まずは受診の際に医師または看護師にご相談ください。

～ 消防訓練を行いました～

庶務係長 巻島 美紀

患者様の命をお預かりする病院にとって、災害対策も重要な責務の一つです。

当院では、1月27日に消防訓練を行いました。勤務者の少ない夜間帯である午後8時に、病棟の4階にて火災が発生という想定のもと、火災ベルが鳴り響いて訓練開始です。まず病棟スタッフによる火元確認が行われ、続いて消防署への通報と患者様、病棟スタッフへの伝達が行われました。

災害時には、パニックに陥らず、早く正確に情報を伝えることが被害を最小限に食い止めることにつながります。入院患者様に火災発生を伝えるため精一杯の声で「火事だ～」と叫ぶ看護師、消防署と連絡を取りあう看護師の緊張した表情からも、一つ一つの情報伝達に大きな責任がかかっていると感じました。



次に、訓練において情報伝達と並んで重点を置いている避難誘導の開始です。寝たきりの患者様を想定した模擬患者は、患者役一人につき病棟スタッフ二人がかりで搬送しました。病棟には多くの身体が不自由な方が入院しているため、災害発生時には病棟スタッフが避難の手助けをする必要があります。今回の訓練では職員が模擬患者となり、その模擬患者を病棟スタッフが搬送しました。病棟スタッフが模擬患者を搬送しやすいよう、シーツに包む一連の動きは非常にスムーズでよく練習している様子がうかがえましたが、搬送は少しぎこちなくもっと練習が必要でした。



非常階段を使用し一階まで避難した後、旧食堂前駐車場まで到着し、安全確認報告により全職員

の避難確認がとれたところで病棟での一連の訓練は終了です。

この後、査察に来ていただいた相模原南消防署から講評がありました。災害時は、指示があった後に必ず大きな声で返事をして確認をしっかりとっていくことが大切ですが、今回の訓練では徹底できていなかったという指摘があり、今後の課題となりました。

そして南消防署員により消火器の取扱い方法と消火器を用いた初期消火訓練、また歩行困難な方の搬送方法といった指導が行われ、消火器などに触れたことがない新採用職員も積極的に消火器を手に取り訓練に励みました。最後に当院の自衛消防隊による屋内消火栓を用いた消火演習が行われ、いざという時に消火活動を行える自衛消防組織の重要性を再確認しました。



災害が起きた時は、冷静かつ迅速に、情報伝達と確認をしっかりと行い患者様の安全確保を行うことが最重要です。実際の災害時は予測できないことも多いので、職員一人一人が何をすべきかをその場で考えて動くことができるようにしていくことが必要だと再度認識した次第です。

表紙の写真

相模原病院自衛消防隊は、相模原市防災協会主催の自衛消防隊消火競技会にて優良賞を獲得しました。先の記事でもご紹介させていただきましたが、自衛消防隊は何度も練習を重ね、競技会本番でも迫真の消火訓練を披露することができました。賞状を持って秋山院長、江口看護部長と記念撮影をする自衛消防隊員の表情は、自信に満ち溢れています。

～ 市道拡幅工事について ～

企画課長 小嶋 美之

当院に来院された方は既にご承知のことと思われませんが、現在、当院正門から西側方面に向かう市道の拡幅工事を行っております。

この工事は、拡幅に必要な当院敷地を相模原市に売却し、同市の事業として行われているものです。今年度は1期工事として、正門から当院旧看護学校前までの区間が拡幅され、翌年度には2期工事としてさらにその西側から当院敷地に沿い、相模台第二団地方向に拡幅されます。

本事業の主な目的は歩道の新設にあることから、地元の皆様の安全性の確保はもちろんのこと、小中学校に通う児童、生徒の通学路としても安心できる環境が整うこととなります。

同地の市道拡幅は地元にお住まいの皆様にとって永年の願いであったと伺っております。当院として本事業に協力できましたことに感謝を申し上げます、また、可能な限りの協力をさせていただきます。

工事期間中は車の走行や歩行にもご迷惑をお掛けすることになりますが、何卒ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

～ 工事前の当院正門西側～



～ 工事期間中(3月9日頃まで車両通行止または片側交互通行です)～



～ 院内コンサートが行われました!～

庶務班長 齊藤 良幸

昨年12月21日に、当院外来ホールにてコンサートが開催されました。出演は、相模原市在住のマリンバ奏者・松本律子さんです。松本さんは、ソロマリンバパフォーマンスを中心に、各地でのライブ活動、教育機関での芸術鑑賞教室等を行っています。

マリンバは、木琴の大きいものと考えてもらうとわかりやすいと思います。



アフリカからラテンアメリカに広まり発達したと言われており、鍵盤の下に共鳴管があるため音量も大きく、音質も柔らかいものとなっています。

コンサートにいらした、100名を越す入院患者様、患者様のご家族、職員は、まず片手に2本のマレットを持ち両手で4本のマレットを巧みに操る松本さんの技に驚きを感じながら、マリンバの深くやわらかい音色に引き込まれていきました。

演奏曲はクリスマスメドレーから始まり、オリジナル曲、童謡、クラシック等、普段聞きなれている曲でしたが、マリンバでの演奏となるとまた違った味わいになり、暖かい気持ちになりました。

アンコールでは「ふるさと」を会場全体で歌い、会場の一体感を感じながらの終了となりました。

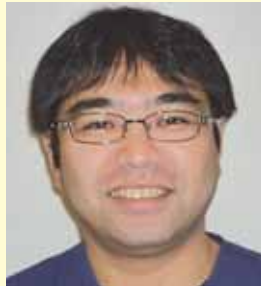


コンサート開催にあたり、お忙しい中快く演奏を引き受けていただいた松本さん、患者さんの移動にご協力をいただいたボランティアの皆さん、会場準備をされた職員の皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。当院といたしましては、今後もこうした院内コンサートをはじめ、入院患者様に安らぎと楽しみを与えることができるような患者サービスを行っていく予定です。今回コンサートを視聴できた方もできなかった方も、ぜひまたご期待下さい!

連載

近隣協力医療施設の紹介コーナー

町田市原町田
「みるるクリニック原町田」



院長
志野原 睦 先生

平成18年4月に、眼科医の妻と共に、横浜線町田駅近くに開業致しました。もともと、相模大野駅近くに父が開業しておりましたが（木村医院）、当初は、大学病院の外来よりも緊張していたのを憶えています。大学病院においては、循環器、呼吸器、総合診療内科に勤務しておりました。その後、橋本倫太郎先生（橋本小児科；世田谷区祖師ヶ谷大蔵）の御厚意により、数年にわたる小児科研修の機会を賜りました。

当初は、2次医療機関への重症患者さまの御紹介に苦慮しておりました。特に小児に関しては、川崎病や血小板減少性紫斑病、白血病など・・・御紹介させていただき、相模原病院小児科に、命を救って頂いた患者さまは数知れません。患者さまが快癒され、退院後に元気な姿を見せて頂くにつけ、先生方をはじめとする相模原病院スタッフのみなさまに心より感謝をいたしております。

当院では、お子様からご年配の方まで幅広く診療させていただいております。眼科におきましても、小さなお子様にも安心して診療をうけていただけるよう、細かな心配りを心がけております。また、糖尿病性網膜症に対するレーザー治療をはじめ、内科とも連携した診療が可能となっております。

このたび、相模原病院の登録医末席に加えて頂けることとなりました。相模原



病院と連携し、地域住民のみなさまの健康維持、快復に貢献ができることを大変うれしく、光栄に思っております。

何卒宜しく願いいたします。

【みるるクリニック原町田】

診療科：眼科・小児科・内科
住 所：東京都町田市原町田1-15-18
電 話：042-710-5300
ホームページ：<http://www.k5.dion.ne.jp/miruru/>
診療時間：眼...眼科 内・小...内科・小児科
休 診 日：日曜、祝日
詳しくはホームページをご覧ください。

	月	火	水	木	金	土
9:30～12:00	眼 内・小	眼	内・小	眼	眼	眼 12:30 まで
15:00～18:00	眼			眼		休
15:00～18:30		内・小	内・小 眼 (17:00 ～18:30) まで		内・小	休

編・集・後・記

寒い日が続く中、如何お過ごしでしょうか。東日本大震災から一年が経過しようとしておりますが、あの日の大きな揺れは今も忘れることができません。またいつ来るかも分からない震災に備え、当院ではソーラーパネルの設置や防災訓練を行ったりと減災・防災対策を講じて参りました。

また、昨年10月より地域医療支援病院の認定をいただいた当院は、これからも一層地域の医療機関と連携しながら地域医療に貢献していく所存でございます。

この「耳よりいいメール」におきましても、ますます患者様のお役にたてるような情報を発信していきたいと思っておりますので、これからも愛読よろしく願いいたします。

編集委員 柳瀬 則人

編集委員 小嶋 美之 高橋 厚美
今田 雅子 鶴見 暁子